

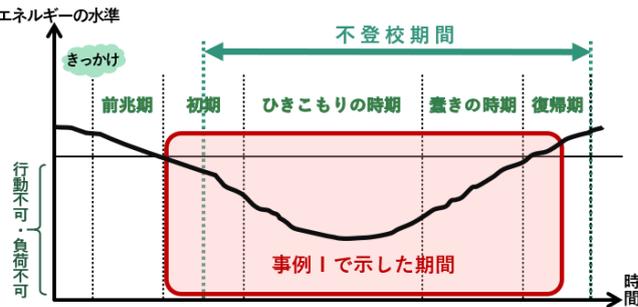
事例Ⅰ

対人関係の悩みから不登校に

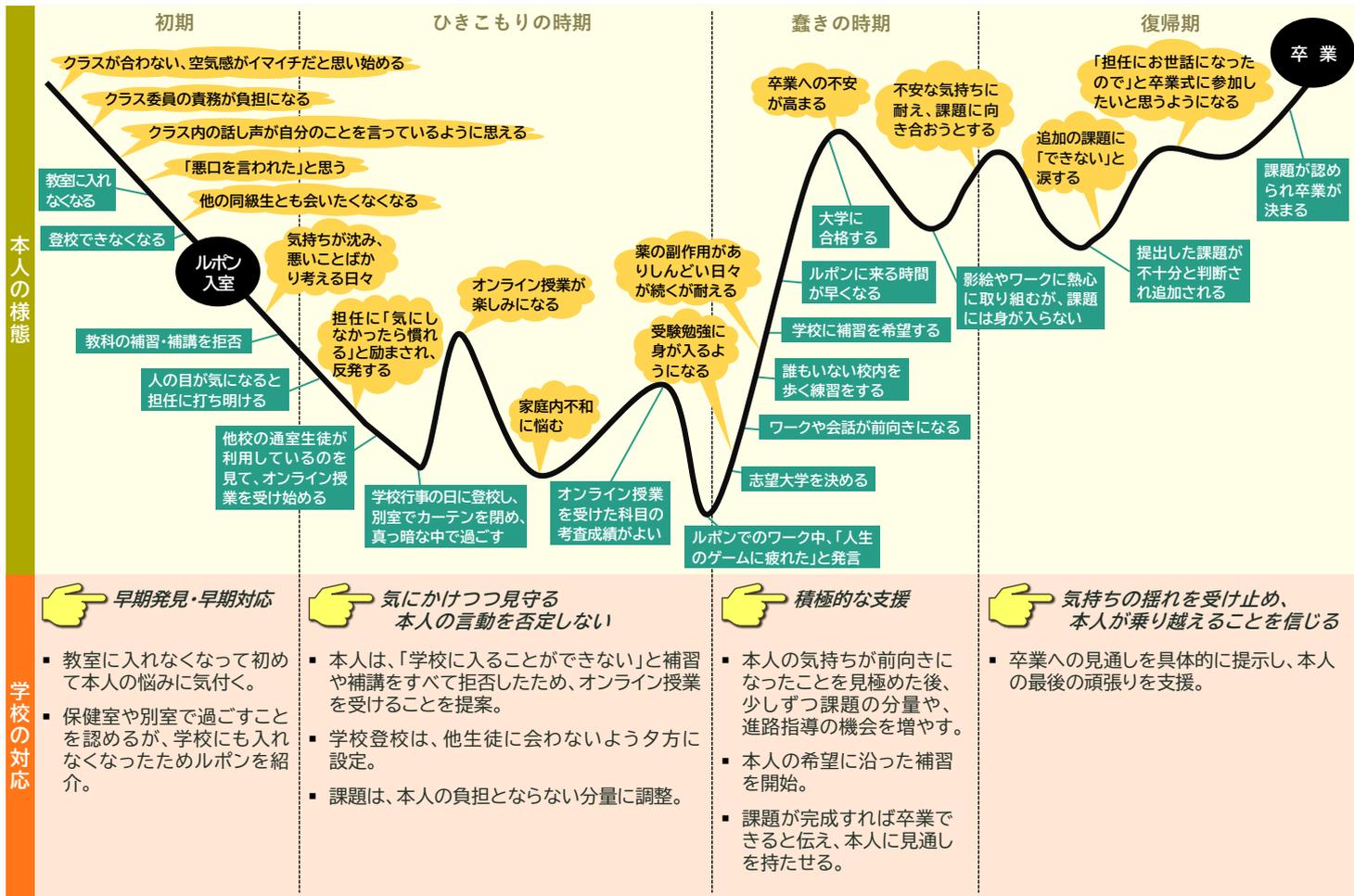
本生徒は、クラス内に親しい友人がができず、クラス内の会話が気になるようになり、また、本人の心情に影響を与えるような家庭環境も遠因となって登校できなくなりました。ルポン入室した当初は学校のすべてを拒否する言動ばかりでしたが、次第に学習支援を受け入れるようになり、進路実現と卒業に向かうことができるようになりました。

◆ 不登校の段階モデル

※このモデルに当てはまらない事例もあります



不登校の状態は上図のような段階モデルで表すことができます。事例ⅠとⅡは、「前兆期」や「初期」に出された何らかのSOSサインに気付いた教員により、ルポン入室につながった生徒が「ひきこもりの時期」や「蠢(うごめ)きの時期」を経て学校復帰や卒業に至るまでの過程を示したものです。事例で見る通り、不登校状態の生徒は小さな出来事でも心境に影響し、気持ちが沈んだり上向きになったりします。また、回復には一定の時間と段階に応じた支援が必要です。



支援のポイント

■ 支援の見通し

対人関係の悩みは、問題の本質を改善することが難しいため、自己肯定感を高め自信を取り戻させる支援が有効です。また、家庭環境が遠因となっている場合もあり、本人の気持ちの揺れを受け止め安心の場で過ごさせる等の配慮が必要です。

■ 段階に応じた支援

- この事例における学校は、本人の様態に合わせた柔軟な対応を行いました。エネルギーが低下している「ひきこもりの時期」では、学校のすべてを拒否する本人の恐怖心を理解し、本人の行動を否定せず強制的な指示にならない配慮を行いました。
- 「気にかけて見守る」期間を経てエネルギーが溜まり始めました。溜まったエネルギーは、学習支援による自信の回復や、大学進学という目標設定に発揮されました。
- 前向きな言動が増えた「蠢きの時期」になってから、積極的に進学や卒業に向けた支援を行いました。卒業への不安による動揺は最後までありましたが、ルポンでも課題の進捗状況を一緒に確認し、卒業への希望を見失わないよう支援しました。
- 困難を乗り越えた成功体験が卒業式参列につながりました。

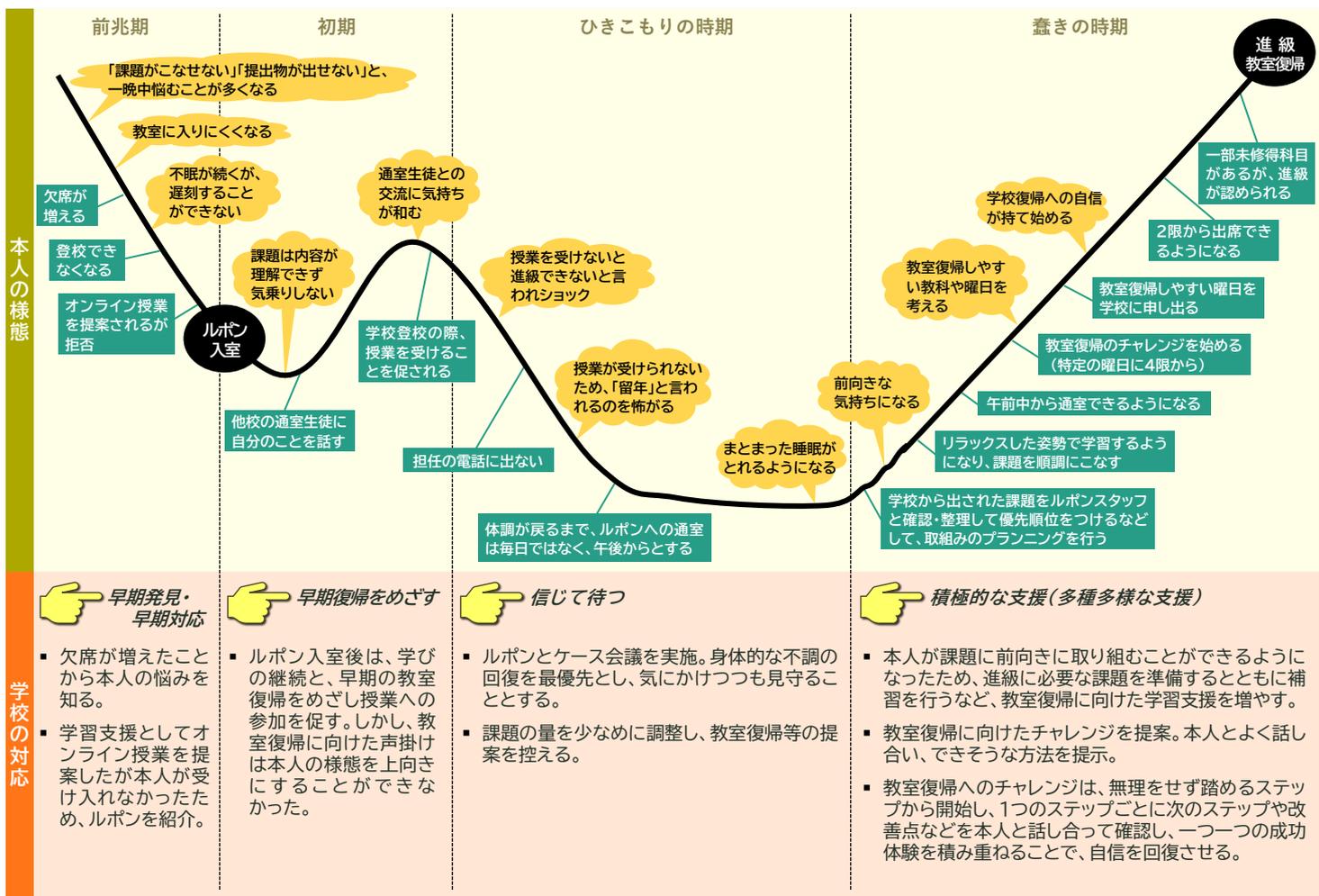
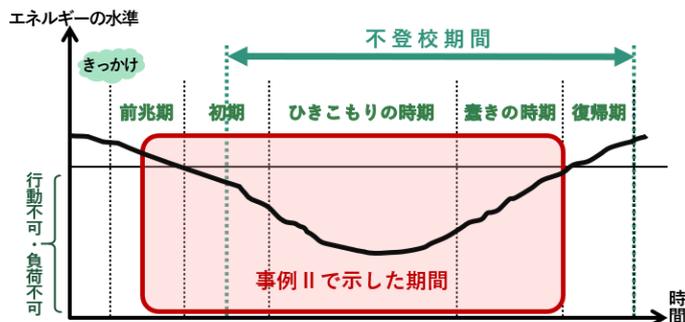


学業不振から不登校に

本生徒は、入学直後から日々の課題がこなせず、次第に朝まで悩むことが多くなりました。クラス内の他生徒に対し臆する気持ちが強くなり、保護者の期待もプレッシャーとなって、やがて登校できなくなりました。ルポン入室当初は課題がこなせず、体調もすぐれませんでした。体調を整え、対人緊張がほぐれると前向きに学習に取り組むことができるようになりました。

◆ 不登校の段階モデル

※このモデルに当てはまらない事例もあります



支援のポイント

■ 支援の見通し

この事例の場合、学業不振に悩み不登校となった背景要因の一つが、対人緊張でした。「授業が分からない」「課題ができない」等、悩みや困りごとを教員や友人に打ち明けられず、一人で頑張ろうとして心身ともに不調になってしまいました。また、保護者からの期待もプレッシャーとなっていて、家庭でもリラックスできなかったのかもしれない。

■ 段階に応じた支援

- この事例における学校は、「ひきこもりの時期」も教室復帰に向けた声掛けをしました。心身の不調が続きました。そのためケース会議で支援の方向性を協議し、無理のない通室に切り替えたことで身体的な不調が回復し、復帰へのエネルギーが溜まり始めました。
- 「蠢きの時期」になってから、本人は前向きな気持ちで学校からの課題に取り組むことができ、分からないところを教員に質問したり、補習をしてもらったりしたことで、学習への恐怖心が和らぎました。
- 「蠢きの時期」であっても、不登校生徒にとって教室復帰のハードルはかなり高いものです。本人とできそうな方法をよく話し合い、成功の可能性が高いスモールステップからチャレンジすることで少しずつ自信を回復させました。
- 「引きこもりの時期」を信じて待つためにも、早期発見・早期対応が重要なポイントでした。

